

【取扱い厳重注意】

○質問者 例えば(4)の第二原発から10kmの避難指示というのが12日の5時39分に出ているのですが、2Fから10kmというのが出た経緯とか理由というのを覚えてらっしゃるとかということはありませんか。

○寺田補佐官 このことだけに限ってではなくて、避難の話をしているときの話は先ほど申し上げたとおりと、これは後になるのか、アメリカが言わば80kmだ何だという話をしていたり、この12日の17時はもう爆発の後だとは思いますが、私が覚えているのは、政治側の方が非常にアメリカがそういうようなもっと広い区域にやっているということも踏まえて、拡大する必要はないのかというような懸念を持っていました。

それに対して、班目さんと恐らく先ほどの博士だと思いますが、どんなことがあったって20km以上は必要はないということはかなり自信を持って言われていたと思うので、正直、班目さんがお話をされることに関しては、もう前日ぐらいからちょっと政治側の人間がこの方の言うことはやや怖いとか、完全に信頼できないのではないのかというのはあったのですが、久木田さんがお話をされているから大丈夫なんだろうなというような雰囲気がありました。

○質問者 それと、前に戻るのですが、1Fに視察に行かれた際に、1Fでオフサイトセンターに詰めていた国の事務方が合流して、総理に2Fの緊急事態宣言等の決裁ということで御説明されているようなのですが、それは覚えはありますか。

○寺田補佐官 当該その案件かどうかは別として、お話が終わって部屋を出られる前にどなたかが寄ってきて、それはその方だったので、何かサインを求めているなどというのはありました。総理がこれは何なのだという話をされているのは見ていました。ただ、内容自体に関しては、私は把握していません。

○質問者 それは大体短時間で終わったような印象ですか。

○寺田補佐官 非常に短時間だったと思います。部屋自体にいるときも、医務官の方から余りこの場に長くいることに関してはお勧めできないという話を警察の秘書官を通して私の方に入りまして、勿論、全般的に長居できないような形でしたので、かなり迅速に部屋を出ようとしている最中でありましたので、余り座って説明をゆっくり受けるような環境ではなかったと記憶しています。

○質問者 先ほどのお話で、避難区域を決めるときには大体総理は危機管理監とかそういう事務方の人も呼ぶようにしていたということなのですが、総理が危機管理監等を呼ぶべきだと総理自らの発想でされていたのか、だれかがそういう助言をしていたのかというのをおわかりになりますか。

○寺田補佐官 先ほども申し上げた避難区域をどうするという話に関して、基本的に長官の方、福山さん含めてそちら側でやっていた上で総理に御説明ということなので、もうその前段階のところで危機管理監を含めて、長官のところに入っていたので、総理に御説明するときに当然同席するというのは、余りだれかから言われたこともなかったし、どれぐらい広げたらいいかということは安全委員会の方々の助言ですけれども、広げる場合に人

【取扱い嚴重注意】

口がどれぐらいいて、どれぐらいのマンパワーが避難させるときに必要なかという実務的なことに関しては危機管理監がお答えするという役割分担に近かったです。

○質問者 わかりました。ありがとうございます。

○質問者 済みません、ちょっといいですか。この手順的なことなのですが、避難の範囲を決めたときに、先ほど枝野長官と福山官房副長官の中でいろいろ議論されて、事務局サイドといいますか役所の人間等も詰められて、そこである程度決まったら、それから総理のところへ執務室に説明に行って決裁をいただくという流れになるのでしょうか。

○寺田補佐官 その間の間隔自体が悠長なものではなかったと、いきなり総理のところへ全員集まってその場で一から始めて議論という雰囲気ではなかったです。ある程度の安全委員会の方々がどう考えているかということも福山さんとか枝野さんのところまで含めてなのか、多少は整理した上で最終的に総理のところへ御説明という形だったと思います。

なので、避難区域の策定に関しては、先ほど申し上げたデリケートな範囲で、避難区域の話らしいと、今、総理のところへ案件として上がってくるのはというので寺田さんも入ってくれという話で私が呼ばれて入るみたいな、呼ばれてというか、私も同席しますと言って同席しているというのがありましたので。

○質問者 寺田先生が同席されるのは、最初の下。

○寺田補佐官 下のときには入らないです。総理のところへ。

○質問者 行くときということですか。

○寺田補佐官 今、長官が来るとかという話で大体。突然入るときも山ほどありましたけれども、その話で入ると。伊藤危機管理監を呼べというのは、多分警察の秘書官が呼ぶ形になると思うので。

○質問者 そうしますと、最初のいろいろ検討する作業というのはどこでやっていたかというの。

○寺田補佐官 長官室か、そこが一段階本当に実務的に福山さんのところでやって長官の決裁を受けて総理という順番なのか、そこは。

○質問者 直接入られているわけではないからわからないですね。

○寺田補佐官 わかりません。ただ、必ず長官と副長官、福山さんが一緒に。

○質問者 そうしますと、総理のところへ入られるときに、伊藤危機管理監を呼んでくれとか、西山官房副長官をとという話になるということは、つまり、それまでは伊藤さんとかは一緒には入られていないということなのでしょうか。

○寺田補佐官 それまではどうなのかわかりません。そこは枝野さんと福山さんしかわかりませんが、勿論、避難区域の話というのは、ではここから避難区域の話をしてしまおうという話をする場合も勿論ありましたけれども、何かしら伊藤さんと呼んで聞くということもあつたとは思いますが。なのでそこら辺はちょっと私のレベルではわかりません。

○質問者 それで総理に御説明しようというときには、その説明は総理の執務室ですか。それとも横の応接室。

【取扱い嚴重注意】

○寺田補佐官 執務室です。

○質問者 わかりました。11個の質問事項の中での(1)(2)(3)というところは、ここは特に(3)は入られていないのでしょうかけれども、(1)(2)というのはそういうやり方でやっていたかどうかというのは余り関与されていないので。

○寺田補佐官 わからないですね。

○質問者 しかし、今、説明いただいた話というのは、(1)(2)のときのやり方であった可能性もあり得ますか。

○寺田補佐官 可能性の話で言うと否定はできないと思います。私が入ったであろう(4)(5)(6)は必ずそういう形でやっていたので、私の印象としてはそういうふうな1つのルールがあると思っていました。

○質問者 わかりました。(5)のときなのですからけれども、これは総理、執務室の横の応接室、そこでまずはいろいろ議論があって、どうも今まで我々が聞いている話を総合しますと、どうも海水注入の話と一体となって(5)の議論というのがあったらしくて、海水注入するのは大丈夫なのか、大丈夫でないのか、再臨界はどうか、再臨界が危ない可能性があるのだったら避難していいのかという流れの中で一体となって話が出てきているようなのですが、そういう流れだったとすると、何か御記憶の中でその流れはそういえばあったかなというようなことはどうでしょうか。

○寺田補佐官 先ほど申し上げたとおり、海水注入自体の議論があったこと自体私はわかりませんので、そのことと連動して避難区域の話があったかどうかということはわかりません。

それと応接室、そういうニュアンスで言われたのとは違うのかもしれませんが、応接室で避難区域を本格的に議論するとかというのは多分しないと思います。応接室自体は非常にいろんな方が出入りするもので、こういうデリケートな話は多分そこではよほど入ってはだめという整理をしないとできないので、やるとしてもそのときに海水注入にだれが入っていたか十分私はわかっていませんけれども、長官室とか副長官室とかちゃんと、応接室は非常に出入りが激しいところだったので、それ以外のところでやるとしたらやられていたと思います。

○質問者 そうしますと、(4)(5)なのですからけれども、このときは長官室で話があったかどうかというのはわかりませんか。

○寺田補佐官 わかりません。

○質問者 総理室に入られるときには、寺田先生も一緒に。

○寺田補佐官 私は避難の話をしているときにはいたと思います。3から10ですか。いずれにしても拡大するときにはどれぐらいの方がいるのかという話のときに非常に大きな人数の方がいらっしやって、最初の避難のときにさまざま現場の方々がこういうような苦勞があったとかといった記憶があるので、こういうときにはいたと思います。

○質問者 最初のという話が出てくるということは、つまり拡大のときだということですか。

【取扱い厳重注意】

か。

○寺田補佐官 拡大のとき。

○質問者 そういう席で、なぜ 10km でなぜ 20km とかという根拠についての議論はなかったですか。

○寺田補佐官 安全委員会の方々からの明確にどのようなことが想定できるから、その場合は何 km というような話ではなくて、先ほど申し上げたとおり、どのタイミングかは別として、20 以上に広げなくていいのかというか、アメリカぐらい広げなくていいのかという話のときには、いや 20 で十分だという話はチェルノブイリの話とかもいろいろ織り交ぜながら安全委員会の方が言っていた記憶はあります。それ以外の何 km に関しては、明確な理由を持って何 km という話を安全委員会の方々が行っていた記憶はないですけれども、安全委員会の方々は今言ったようにそのぐらいの距離で大丈夫という話をされているのは記憶があります。

とにかく総理は自分から km 数をお話をするというのを避けている印象がありました。こういう場で話すのがいいかどうかあれですけれども、非常に総理としては、それは法律のたてつけというか、助言を受けるということに忠実であろうという気持ちもあることは十分わかるのですが、どこか自分自身で決めたくないというような雰囲気があるなどいうのを近くにいた人間として違和感を持って見ていたので、とにかくそれはちゃんと安全委員会が言っていることということに気がしていました。

その後、これ以外のときに 20 から 30 とか何とかというのを小佐古さん含めてがっつと、安全委員会が一応いろいろ考えていることに対して参与の小佐古さんがいろいろ話しかけるということはあったのですけれども、そのときに総理の方からそれは一応政府として法律のたてつけ上安全委員会からの助言を受けるということになっているのだからという理由で、安全委員会の言っていることを支持しようとするときがありましたので、基本的には一貫して自分からというよりは安全委員会の方々が出てくる。安全委員会が出てくることの km 数で理屈として合ったのは、先ほど申し上げたとおり 20km 以上は必要がないというときの理屈ぐらいしか私は聞いた記憶がないです。

○質問者 わかりました。実はその 20km 以上は必要ないという議論は、(6) の 20 から 30 を屋内退避にとどめるときに議論としては出ていまして、30 に広げる必要がないかという議論で、もうそれは必要ないというのが結構安全委員会から出ているのですけれども、寺田先生が聞かれたのはそのときの議論ではないでしょうか。

○寺田補佐官 厳密には分けられないですけれども、もう今すぐにでも爆発するのではないかな、爆発的なものから来る避難区域の拡大的な発想と、ある種まだこの 15 日も朝の段階で爆発していますからあれですけれども、そのときに話したニュアンスとは違って、アメリカの 80km が出たのはいつぐらいだったのでしょうか。そこら辺は私の中での時系列があれなのです。政治側の方は。

○質問者 それとセットなのですね。

【取扱い厳重注意】

○寺田補佐官 セットかどうか分からないですけども、そこで待機していたときもあります。その前の段階でも、20km は必要ないと単純に言っていたときもあるかもしれません。

○質問者 3月16日です。

○寺田補佐官 それより前から多分。

○質問者 13日と14日のときにも、20kmの話がすでに出ているのですが、これを30に拡大すべきではないかというような検討はどうもしているようなので、恐らくそのときの話なのかなとは思っています。

○寺田補佐官 km 数的な理由を出されたのはそのときぐらいしか記憶がないですね。あとはある種3から10と広がっていくことに関して、一日一日環境が悪化していっているの、そこら辺に対して政治側の避難区域はこれぐらいで大丈夫かという危機感というのはあったと思います。

○質問者 そうすると、寺田先生の御記憶としては、(6)は15日で爆発事象は一応すべて終わってしまった後の話なのですけども、そういう爆発事象が起きる前というか、まだ起きつつあるような状況でそういう議論をしている記憶があるということですか。

○寺田補佐官 避難区域の拡大に関しては、爆発という事象が起きた後にぐっと話が急に進み始めるという雰囲気がありました。勿論、爆発をどこまで予見できていたかという話になりますけれども、やはり一番最初の爆発に関しては班目さんがかなり強くないとして言っていたので、予見はみんなが頭の片隅にはあり得るとは思っていたと思いますけれども、しっかり予見した上でしゃべっている感じはなかったです。

その以降は、今後また同じことが起きるかもしれないという話はあるけれども、急拡大はできないだろうみたいな話も多分あったのだと思います。

○質問者 わかりました。

○質問者 その避難の決定のところでは1点だけもし御記憶があればなのですけども、この質問事項の(4)(5)というのは先ほどおっしゃったお話ですと、総理のところには官房長官室で一旦協議したものを持ち込んで決裁を得るような形だったということなのですが、(5)の場合というのは、官房長官とかと一緒に入っていたような感じだったのでしょうか。

○寺田補佐官 だれがですか。

○質問者 補佐官がです。

○寺田補佐官 先ほど申し上げたように、どのケースに私がどのような形で入ったかは記憶があいまいなのであれなのですが、何度かあるうちに長官が入られる、福山さんも入られると、避難区域の話だということで、それと一緒に秘書官室にいた私が入るということはありませんでした。そのケースがこれのどれに当たるかというのはわかりません。

○質問者 わかりました。

○質問者 何度ぐらい入られた御記憶がございますか。

【取扱い厳重注意】

○寺田補佐官 避難区域の関係ですか。

○質問者 はい。今、なされていたロジでまずは議論して危機管理監の。

○寺田補佐官 わからないです。

○質問者 わかりました。

○質問者 先ほど人口はどれぐらいという話が出ましたけれども、避難区域を設定して、それだけの人口をどう移動させるとか、ちゃんとできるのかとか、そういう議論は全然しませんでしたか。

○寺田補佐官 それはしました。

○質問者 どんな形で。

○寺田補佐官 同心円状でやっていましたので、広げた場合、それは何 km から何 km のときかというのは記憶がないですけれども、広げた場合には人口がどれぐらいだということを伊藤危機管理監の方からお話があって、彼らの言い方ですと病院が何個あって、その移設先がどうあってと、どれぐらいかかる。時間的な軸みたいなのを言ってきました。そこら辺も班目さんだったか、大体どれぐらいがいいということをオーソライズする方を含めた上で一緒に話していた記憶があります。

○質問者 避難の話から戻るのですけれども、その後、3月14日の午前11時過ぎに3号機がまた爆発をしたのですけれども、その際というのはどういった形でこの爆発を知られたとか。

○寺田補佐官 かなり1号機のとくと似ていて、私は秘書官室にいました。たしか総理が山口公明党代表と執務室でお話をされていたのだと思います。これもまたチャンネルを分けていたので、秘書官室のチャンネルだったかわかりませんが、また爆発の映像が入ったので、すぐ総理にお伝えしなければと思って入っていきこうとしたときに、今、山口さんとある種公明党の代表と総理がお話ししているというかなりタッチなシチュエーションだったので、でも公明党さんはどなたかいたかな。ただ、これはこういう事情が出ているので、それは勝手にどんどん入って行ってテレビを付けてごらんになっていただいた記憶があります。

○質問者 そのときの総理の御判断というのは御記憶はございますか。

○寺田補佐官 爆発の映像自体が1号機に比べてかなり縦に長かったのと、総理が色が黒いのに御注目されて、「これは黒いよな」と言ったのだけは印象的に残っています。

それが山口さんといらっしゃったときに言ったのか、山口さんがその映像を見てすぐお出になられたと思うので、その後改めて長官やら何やら入っていただいて言ったときに「黒いよな」と言ったのかわかりませんけれども、また1号機と同じように関係者を集めてと言われて、長官やら班目さんやら保安院やらが集まったというのはあります。

○質問者 わかりました。その爆発を受けて何か特別総理から御指示が出たとか。

○寺田補佐官 1号機と一緒にです。これは何が起きているのかということの話をしたと思います。

【取扱い厳重注意】

○質問者 わかりました。その次の質問事項に移るのですが、その後、政府と東電の統合対策本部というのが3月14日の夜ぐらいから話が出てきて、最終的に15日の朝に立ち上がるのですが、この設置の経緯については御記憶はございますか。

○寺田補佐官 14の夕方くらいからですが、ちょっと正確な時間は覚えていないのですが、私が長官室にふらっとというわけではないけれども、ちょうどいろんなところが直ちに何かしなければいけないというタイミングはなかったもので、長官の御様子をうかがいに部屋に入ったら、海江田大臣と長官がお二人いらっしゃったのです。それでは、まずいなと思って出ようと思ったら、「寺田君、入っていいよ」と言われたので、入っていたのです。

いろいろなそのときの状況をお話ししているときに海江田大臣の秘書官が入ってこられて、だれだと聞いたのかわかりませんが、海江田大臣に東電からお電話ですと言われて、珍しく海江田大臣が「そんなのいいよ」と強い口調で言われたのです。「断ったからいいよ」と話をされたのです。私も差し出がましかったのですが、「何かあったのですか」と話を聞いたら、東電が撤退したいと言っているのだという話をしたときに、長官が「私にも来たよ」という言い方をしたのです。ちょっとただ事ではないなという雰囲気があったので、海江田大臣には「僭越ですが、そのような大事なお電話であれば、ちゃんとお出になってしっかりとお答えになられた方がいいのではないですか」という話を申し上げたら、大臣が「そうだな」と言ってお出になられたのです。それで長官と話をすることになっているのですかという話をしていました。

その後、一連も含めて東電側はこの問題に関しては報道でいろいろどちらの両論も言われているのであれですが、もうなすべきことがないという東電側の主張だと、だから撤退させてくれというニュアンスだったので、その後、応接室にいつも集まっていたのですが、安全委員会の人間も保安院の人間もまだやれるべきことはあるかという議題でしゃべっているのです。なので、東電が言っている、必要な人間は残すけれども、それ以外の人間は帰すというようなニュアンスでは決してなくて、海江田大臣も長官も含めて、やはり基本的には撤退させてほしいという話になっていたと思います。

いつごろ海江田大臣が私の目の前でお電話を取られたのかわからないですが、私自身としての記憶があるのは、そのときはもうNHKとかずっとオンタイムで2号機の燃料棒が出続けているというのを記者会見を東電はずっとやっているのです。ある瞬間に8時何分ぐらいに武藤副社長が会見を行いますというのがセットされて報道に流されたのです。その海江田さんと長官にかかっている電話とそれが私の頭の中では、これはもしかしたら政府がうんと言ったら、ある種今まで広報の人間がしゃべっているのに急に言わばえらい責任者が出てきてしゃべるといえることは何か重大な発言をするのではないかという恐怖感を持った記憶があるので、武藤副社長の会見のセット時間より前に多分私は撤退の電話を聞いていると思うのです。

大変なことだなと、その日の朝だったか、2号機のベントをして注水しなければいけな

【取扱い厳重注意】

いという話になっていたのですが、その前の日から東電側は2号機もベントが必要になりますということは言っていたのです。

ちょっと横道にそれですけれども、そのときに細野さんも私もその説明を聞いていたときに、素人考えで申し訳ないけれども、1号機はベントできると言ってなかなかできなかったのではないかと。もうベントが必要だとわかっているのだったら、恥ずかしい発想ですけども、どうせ後でやるのだったら竹竿でもいいから何か刺して開けておけばいいではないかみたいなことを言っていたときに、絶対にベントはできます、技術的に理屈はありましたけれども、もしできなくてもベント弁は何個もあるのだから絶対大丈夫ですと説得されて、そうなのかと行って14日に入って、やはりベントができてなくて水が入らなくて燃料棒がむき出しになっているという話だったので、いよいよ全然統治能力がないというので、5階の応接室全体として、ちょっとこれはただ事ではないなど、しかも東電が撤退したいと言ってきているというのがありました。

私は初めてですけれども、経産次官の松永さんが5階をややうろうろし始めたのです。それを海江田さんが、松永まで来てあれも同じことを言いに来ているのではないかみたいなことで、ややギクシャクし始めたのです。8時の武藤副社長の会見自体は、多分何も大した話はなく、広報で言っていたことを改めて言って終わったのです。その後、炉の状態は今後どうなるのかということを経産、海江田大臣、福山副長官、私、細野さん、安全委員会は班目さんともう一人ぐらい久木田さんだと思いますけれども、あとは安井さんぐらいで応接室ですと話をしていました。

彼らが一般的に言うのは、今はまだやるべきことはあるけれども、何度もこれと同じサイクル、結局ベントが弁を開いて蒸気を逃がして水を入れて、またベント弁が閉まってという言い方をしたと思いますけれども、閉まって圧力が高まってまたベントして水を入れてというサイクルがいつか破綻する可能性があるという、今はまだやるべきことはある、撤退しなくてもいいけれども、いつか何かこのサイクルが金属疲労でもないですけれども、できなくなる瞬間が来る可能性が高いというのが大体の専門家たちの話の総合だったので、これは今撤退すべきではないと思うけれども、こういう流れが続く以上、明言はしていませんけれども、ある程度撤退を了解するとも思っていますけれども、ぼんやりとどこかで手の打ちどころがないときになった瞬間に政府としてどう行動するのだということを決めておかないといけないよねという話である程度話を整理した上で、総理を呼んで御判断いただくという話の流れになりました。

ある種、ほとんどずっとダウンスケールと言って計器が壊れていて今炉の状態がどうなっているかわからないという状態だったのですが、それでも定期的に書類で炉の状態を示す紙が散乱していた応接室を全部片づけて、藤井副長官とかも何か大事な判断をするときには同席させてくれということだったので、総理を交えてやる会議を3時過ぎぐらいにやっとな。

○質問者 場所は応接室ですか。

【取扱い厳重注意】

○寺田補佐官 片づけて応接室でやりました。総理と長官と海江田大臣と松本防災大臣と3長官、3補佐官、安全委員会は班目さんともう一人、保安院が安井さんともう一人くらいいたと思いますけれども、そういうメンバーで、勿論、東電は抜いた上で会議体をセットして総理をお招きして長官から御説明をしたと。

長官自体としては、非常に饒舌で説明が上手な方なのですけれども、そのときだけはややちょっと、一言で言うと今は撤退しないけれども、撤退は断りましたけれども、いつになったらそういうデッドラインはあるのでしょうかというニュアンスで、いつどんな状態になったら撤退はあり得るのかというニュアンスをしたときに、総理がかなり強い口調です。「もうそんなのはあり得ないのだ」という話をして、保安院と安全委員会の一人ひとりに対してまだやることはあるよなという話を議論していました。

全員がまだそれまではいつまでもやり続ける、いつか危ないことになるのではないかと弱気だったのですけれども、総理からかなり強く言われたもので撤退はないと、まだやるべきことはありますと全員が言ったので、そうなんだ、絶対やることはあるのだと言って清水を呼べという話につながって、私も突飛な話だという印象がないので、総理は前々から情報を政府として全面的にバックアップできていないというか、東電と一体化できていないから、あちらに本部をつくるぐらいでないだめだと前から言っていた節は記憶があるのですけれども、東電の清水を呼んで統合本部をつくるという話をその場でされて、言わば私たちは御前会議と呼んでいましたけれども、その会議が解散して政治組、バッチ組の人間だけ、あと瀧野副長官だけ事務方に入って執務室の方に移りました。それで清水さんを待っていたというのが流れです。

まだそのままずっとしゃべっても大丈夫ですか。

○質問者 はい。よろしく申し上げます。

○寺田補佐官 清水さんが執務室の前まで来たという連絡を受けて私が迎えに行って、3人で来られているということだったので、3人全員でもいいですかと総理に伺っていいよと言われたので清水さんを迎えに行った。清水さんは1人でいいということだったので、お付きの方2人を別室に置いて1人で入られた。

ほぼそこでは撤退云々ではなくて統合本部をつくるという話を総理から一方的にされました。私自身は非常に法律的なたてつけはどうなっているかとか物すごい気になっていましたから、とにかく合意はちゃんと得た上でやらなければいけないというので、総理が一方的に話されて、清水さんはちょっとあいまいな返事だったのですけれども、最後に清水さんに私の方から「合意の上でということですのでよろしいですね」と言ったら、よろしいですという話になったので、何分後に行くからという話で準備してと。細野を付けるからと細野さんに清水さんにずっと東電まで付いていけということで、恐らく清水さんと細野さんがそのまま車に乗っていくと。お付きの方2人を完全に残したまま清水さんだけ帰ってしまって、それまでの間に官邸側として記者会見を何時に開いて、長官は何を言うか、総理が下のぶら下がりで何を言うかというのを整理して東電に向かうというのが一連の流れ

【取扱い厳重注意】

です。

○質問者 わかりました。幾つか細かい点なのですけれども、最初、さかのぼって東電から海江田大臣のところに電話がかかっていると。補佐官の方からそういう電話であれば出られた方がいいのではないかとと言われて、海江田大臣が席を離されて、官房長官から状況について説明を受けたということだったのですけれども、具体的に官房長官から東電がどういふことを言っていてどういふやりとりがあつてといふのは。

○寺田補佐官 もうなすべきことがないから撤退をしたいと言つてきているのだといふニュアンスでした。だから、直ちにそれはだめだと言つたといふのは長官から聞きました。

○質問者 わかりました。その後、総理のところに皆さん集まつて。

○寺田補佐官 総理の応接室に集まつたのです。

○質問者 済みません。応接室に集まつて官房長官から状況を説明したといふことだったのですけれども、官房長官の説明ぶりといふのは今はもう既に断つたといふこと。

○寺田補佐官 勿論、ちやんと言つた上で。

○質問者 言つた上で総理に説明をされたと。

○寺田補佐官 どういふ言葉遣いをしたかまで厳密に覚えていないですけれども、とはいへ状況は好転していないので、どのタイミングになったら白旗とは言わないですけれども、いろいろ考えなければいけないのではないですかといふニュアンスに近いです。

○質問者 そうしますと、その後、清水社長を呼ぶといふ判断と、今すぐに東電が撤退するわけではないといふ説明があるにもかかわらず、総理は清水社長を今すぐ呼べとおつしやつたといふことでしょうか。

○寺田補佐官 そうですね。今の問い自体が何と答えていいかわからないですけれども、総理自身にしてみると、撤退といふ発想自体は何があつてもない。こういう状況を迎えてこれから対応をしていく上では、もう官邸にいて東電から一方的に電話を待つとかといふことをやつていてもだめなのだから、現場に行かなければいけないといふ発想に移つていた。なので、清水を呼べといふ話になりました。

○質問者 わかりました。枝野長官を含め、総理に説明をされていた方々といふのは、撤退イコール全員がいなくなるというようなニュアンスで説明をされていたのですか。

○寺田補佐官 なので、海江田大臣も長官も含めて強く否定されたのだと思います。

○質問者 総理もそういう認識でお話を受けられてと。

○寺田補佐官 そういうような認識で受けられていると思いますし、そのとき、どのタイミングかわかりませんが、吉田所長に細野さんが電話しているはずなのです。吉田所長に「まだやるべきことはあるか」といふ話をして、吉田所長が「まだまだあります」と。多分武器がないとかそういうような話は言われていたかもしれませんが、吉田所長からのそういう答えを受けて、現場の人間もまだやれるといふことはあると言つていふのではないかといふことは、総理は言われていたと思います。

○質問者 わかりました。このやりとり、一連の流れの中で、一部新聞報道等にあるので

【取扱い厳重注意】

すけれども、清水社長を呼ぶに当たって、福山副長官と寺田補佐官が事前に清水社長に連絡を入れておいた方がいいのではないかというやりとりがあったと書かれているのですけれども、そういったことというのはございますか。

○寺田補佐官 記憶にないのです。それは実際、福山さんが記憶していて、私もそれを言われたのですけれども、多分、清水さんが玄関まで来て部屋の奥のところまで連れて行くまでの間に私に言うておいた方がいいのではないかといって、私は前向きな話をしたみたいですが、余り記憶はないですね。実際として、座ってから余り撤退の是非という議論ではなくて統合本部の話から入りましたので。

○質問者 そうしますと、迎えに行かれて上がってくるまでの間に何かやりとりをされた御記憶というのはありますか。

○寺田補佐官 私が迎えに行ったのは、官邸の5階の執務室のドアの前までです。

○質問者 わかりました。その後、清水社長と総理が話をされて立ち上げが決まったのですけれども、寺田補佐官御自身は本部に行くとか何か役割を担うとか、そういうものはどうでしょうか。

○寺田補佐官 一緒に総理が行かれるときには付いていくという話になりましたので、私はそのときサンダル、シャツでユニクロのフリースを着てみたいな格好だったので急いで着替えて、かつ下で総理がお話しする内容を整理していた。すぐ行こうとしたのですけれども、急な話だったので、総理専用の車がなかなか手配がつかない、ドライバーがつかないので、ちょっと予定していたより時間が過ぎたかなというぐらいでした。とにかくそういうロジ的なことを含めてばたばたしていました。

○質問者 わかりました。統合本部では総理御自身が本部長で、海江田大臣が副本部長で、事務局長に細野補佐官という役割分担の話がいつごろだれから出てきたのかというのは記憶ございますか。

○寺田補佐官 恐らくそれは総理を入れて話さないといけないことなので、記憶というよりはその間の中での物理的な話で行くと、御前会議の応接室が終わって、バッチ組と瀧野さんだけが総理執務室に移ってその場で話している中で大体の概略を決めるぐらいしかないのかなと。もう清水さんと細野さんが一緒に出て行ってしまいますので、細野さん抜きで話をするか、もう清水さんが出られてからもう何十分とかという1時間レベルぐらいの間で東電に行くという話になっていましたので、その前の段階でお話しているのかと思います。多分清水さんがいる中でお話を改めてしていると思います。私が本部長で彼が何とかというような話。

○質問者 わかりました。その後、総理とほぼ同じぐらいのタイミングで東電には補佐官も行かれたのですか。

○寺田補佐官 私は総理と同じ車にそのときに乗っていました。

○質問者 そのときに総理とお話はされたとか記憶はございますか。

○寺田補佐官 お恥ずかしい話なのですが、総理自身がそのときに本当に線量が最後まで

【取扱い厳重注意】

上がっているときには、最後、自分はその現場に行って、現場とはどこまでの現場かわかりませんが、陣頭指揮を執ることをせねばいけないだろうという覚悟を持たれていました。

統合本部をつくる時も、その後の爆発の前とはいえ深刻な状態だったので、近いタイミングでそういうことが起こり得るのではないかというのはみんな思っていたのですけれども、総理から 11 日の夜の指示よりはもっと激しくですけれども、もう一度現場に行く可能性があるというのがあったので、それは私ではなくてこれも岡本が言われていたと思いますけれども、一応防衛省の秘書官を含めて、ヘリコプターは何時になったら飛べるのかとか、そういう整理を全部してましたので、それを基本的にはいつも車といったら岡本が乗るのですけれども、そのときは岡本ではなく私が隣に乗って、もしそういう環境になった場合には、正直総理が行かれる場合には警護官の人間も秘書官の人間も私も含めて一緒に行かなければいけなくなる。まだ警護官も含め私も秘書官も含めて若いので、岡本もまだ 40 とかなので、そこまで覚悟ができていない人間がいると思う。なので、そのときにはそれ相応の配慮をしてくださいという話はしました。

だから、総理が行かれることに関しては最大限努力するけれども、ある種決死隊のように自分たちまで行けるかとなると、そこはできていないからちゃんと整理しますという話の了解をとりました。そのときは総理は非常に冷静でした。それはわかっていると。放射能に対する瞬間的な放射能及びそういう怖さは十分わかりながらも、とはいえ自分は 60 を過ぎていたので、自分が行って影響が出るのは何年後だからということは冷静に考えていました。そういう話をしたことと、ある種乗ったのはそういう整理をするのと、かなり総理は気持ちが前までは高ぶってらっしゃってましたので、それをダウンさせようと思って乗り込んだというのがあれなので、ただ、私の心配は杞憂に終わって非常に落ち着いていました。

○質問者 わかりました。実際、統合本部に行かれて、総理が訓示というかお話をされたという話です。

○寺田補佐官 そのときにはまた改めて自分で話しながらかなり気持ちが入ってしまって、10 分ぐらいお話をされて、基本的には撤退という話があるけれども、ないと。撤退したらどうなるかというのは皆さんが一番わかるでしょうと。そんなことをしたらまず日本だっただめになるし、もっと細かいことを言えば東電だってなくなるんですよと、覚悟を決めてくれと。60 以上の人間は、最後は自分がその場において作業するぐらいの覚悟を持ってやりましょうというのを、同じことを 3 回ぐらいループしながらしゃべってました。

○質問者 その中で自分もその覚悟であるといったような趣旨の発言をされていると聞いたことがあるのですが。

○寺田補佐官 そうかもしれないですね。はっきりそういうような言い方をしたかというよりは、官邸側の方としては、当然海江田さんとか枝野さんにかかっている電話の内容を含めて言うと、組織としてもう撤退を決めたがっていると。勿論、現実的には危険性

【取扱い厳重注意】

というのは現場にどんどん迫っていますから、それをどのように押さえるという言い方は失礼ですけれども、とはいえ彼らがいなくなった場合にはいくら自衛隊が出て行ってもオペレーションのやり方がわからないですから、何とかして彼らをとどまらせなければいけないという思いがあったので、とにかくそういうふうには君らは覚悟を決めてくれというニュアンスが主でした。

○質問者 わかりました。私からはこの部分で最後なのですけれども、統合本部という本来のたてつけにない組織ができることについて、補佐官御自身の意見であったり、総理の周辺の方の御意見というのは何かございましたか。

○寺田補佐官 私自身としては、たてつけとして本来あるかないかはありますけれども、既存のたてつけ自体はオフサイトセンターも含めて予定していたものはいきなり機能不全になったとか、何よりも保安院自体が独自に自分たちで情報を上げる能力がないと。全部東電から聞かないとわからないと。その東電自体が果たして全部のシビアアクシデントをコントロールできているかといえばコントロールできていないと。予見性もない。パラレルにも考えきれていないというところで統合本部をつくって、統合本部というのか、政府が最大限の助力をして警察も自衛隊も含めてやるには、その場に行って生の情報をその場で聞かないとわからないよなという帰結になったのは一定の理解はします。

ただ、私自身としては、法律上それはどうなっているのか。そういうことをやる権限があるのかどうかとか気になりましたし、先ほど少し申し上げた、逃げようとか撤退しようとしている方々を、いやあなたたちはやらなければいけないのですと言うには法律の力というのも1つはあるので、そういうものがないかどうかというのは、私は考えていました。ただ、それ自体は非常に今そういうことを考えている場合ではないと枝野長官に怒られたりしていましたけれども、一応そういうような形でやっていたと思います。

その瞬間自体がいいか悪いかというのは、それを立ち上げてからというものを線量の問題などの情報というのはもう劇的に変わりましたので、ある種瞬間としていいかどうかという判断はできませんでしたが、結果論としてその後、線量などは分単位でわかるようになりまして、現場の状況もわかるようになりまして、それに向けて何をすればいいのかということも物すごいスピーディになりましたので、結果論としてはせざるを得なかったと思います。その瞬間としてどう思ったかというのはさっき言ったとおりです。

○質問者 清水社長が官邸にいられた15日未明のことなのですけれども、先ほどのお話ですと、バッチを持ってらっしゃる国会議員の方と、あと瀧野副官房長官がいられたということなのですけれども、この中に班目先生とあと保安院の安井さんは入られていないですか。

○寺田補佐官 私の記憶は入っていないと思いますが、そのお二人に関しては入っていても違和感はないと思います。特に安井さんに関しては違和感がないです。とにかく安井さんに関しては、13日からですけれども、非常に冷静に分析されているなというのがバッチ組の雰囲気でもありましたので入っていてもおかしくないと思いますけれども、ただ、いつものメンバーより藤井副長官であったり、松本大臣であったり多めにいらっしゃったの

【取扱い厳重注意】

で、その方々だけでしゃべっていたという記憶があるのです。

○質問者 わかりました。総理を応接室に呼んで、応接室で撤退の可否、是非について議論する前の段階で、つまり総理がまだいらっしゃらない段階で班目委員長が撤退についてどんなふうに述べていらっしゃったかということについて、何か御記憶はありますか。

○寺田補佐官 具体的な言葉は記憶にないですけれども、非常に悲観的でした。安井さんも主観論を入れてしゃべるといふよりは、客観的に非常に厳しい状況といふのは今後より一層深まるというようなニュアンスのことをしゃべられていました。なので、結論からすると、撤退といふのは国家としてはあり得ないものだといふ私も今、思っていますけれども、いわゆる御前会議で議論するときには総理が強い口調で各専門家に詰問をされたので、私は正直カットインして冷静に答えられてくださいと、撤退するかしないかは政治で判断することですから、本当に炉の状態がどうなるかということだけ中心にお考えになってくださいと言ったのですけれども、皆さん撤退はないといふ話をされました。

なので、もともと総理が入る前の打ち合わせでは非常に悲観的な見通しがあったなどいふのは思います。班目さんもそういうようなニュアンスのことを言われていました。細野さんは「班目さんが前の回で、総理が入るまでは『もうだめだ』みたいなことを言っていたけれども、総理のときには『大丈夫だ』みたいな言い方をしていた。あの人は信用できない。」みたいなニュアンスのことを後でぼろっと言われていたことはあります。

○質問者 印象としてはそんな印象は寺田先生もあったのですか。

○寺田補佐官 私もありました。全体的に今撤退したいといふのをみんなで、勿論、相当深刻なダウンスケールばかりでしたけれども、深刻な状態が続いているのでみんな気持ちがかかなり押し込まれていましたけれども、それでも、今はだめだと踏ん張りかえしたとはいへ、先が見えないことに関しての不安感はみんなあったのです。なので、班目さんやら安井さんがそういうような見通しを言うこともかなり重くみんな響いていたという記憶はあります。それを総理がある種何があったって撤退はないといふところで方向が決まったという感じはありました。

○質問者 あと1点だけ済みません。全く話題が変わるのですけれども、SPEEDIの情報を寺田補佐官御自身が目にされたのは御記憶ございますか。

○寺田補佐官 私はずっと仕事をしている合間も、それは仕事としてやっていたけれども、ツイッターとかも含めていろいろ見ていたのです。11日の夜くらいからアメリカの技術的支援を日本政府は断ったということは、私たちにしてみると、根も葉もないような話が広まっているので、そういう噂とかの管理もしたいなといろいろ見ていて、SPEEDIというのもあるらしいみたいなことを、なぜ使わないのだとだれかが言っているとか、そういうのを私は最初ツイッターレベルで知っていたのです。それと同時に多分福山さんもだれかから言われたのか、SPEEDIというのがあるらしいなといふ話は耳に入ってきたのです。

私は班目さんの記憶なのですけれども、班目さんか班目さんの下の方、安全委員会の方

【取扱い厳重注意】

に SPEEDI というのがあるらしいねという話を 11、12 のレベルではなくてもうちよつと経った後に聞いたはずなのです。そのときに、班目さんですけれども、はっきり回せませんと、実データがない限りは回らないのですと。だけれども、あると言っているよといっても、だから、あるのですけれども、どれだけ放射性物質が出たかというのがわからないとそれは計測できないのですとかなり強く言われて、そうなのかとあきらめていたというのが実際なのです。なので、後々 11 日中に SPEEDI が買い回しされてあったと聞いたときには、またどこかでデマがつけられたのかなとかなり過ぎた後に思ったぐらい、当時は全く聞いていませんでしたし、避難区域を決めるときも危機管理監がいましたけれども、危機管理監からはその話も出ていませんでしたし、班目さんもいましたけれども、班目さんからも出ていなかったのも、正直それは後ほどそういう事実があると聞いたときにはきつねにつままれたような感覚を多分 5 階の人間はみんな持っていたと思います。

○質問者 それは統合本部ができる前の段階ですか。

○寺田補佐官 全然前です。後も含めて。ようやくそう言っていた班目さんが持ってきたのが 23 に持ってきていますので、それは初めてだとみんな思っています。

○質問者 わかりました。

○質問者 SPEEDI については、放出源の総量がわからなくても、あるシミュレーションをすれば定量的にはわからなくてもどちらの方向へ放射能が行っているとかそういうことはわかるから、避難の参考データとして非常に重要だったのではないかという解釈が可能なのですけれども、そういうような視点で議論というものはこの 1 週間ぐらいの間ではなかったですか。

○寺田補佐官 本当になかったです。もしあったとしたら当然使っていたと思います。何度か福山さんは聞かれているのです。本当にはっきり言って使えないと一蹴されていた記憶しかないのです。なので、ひたすら同心円が続いていたというのが結果的に見るとそうなんだと思います。

○質問者 菅総理の反応はどうですか。使えないという話に対しては。

○寺田補佐官 菅総理の目の前で班目さんが話をされているというはっきりとした記憶は確実にはないのです。ただ、菅さんもだれかからはそういうのはあるらしいよというのを基本のルートではない形でお知りになられていたのかどうかわかりません。いずれにせよ、正式になんやかんや言いながらも避難区域の距離の確定も含めて安全委員会の方々の御助言を受けるというスタンスをやってきましたので、22 か 23 のときに出されたのも初めてのものとして総理としてもお考えになられていると思います。

○質問者 避難区域を 11 日から 12 日にかけて変更しているわけですがけれども、変更するときの基本的なデータとしてモニタリングポストなどのデータとか、モニタリングカーのデータとか、いろいろと汚染範囲が広がっているみたいなことは当然いろいろ報告があったのではないかと思うのですが、これは判断するときには原発プラント自体が危機的だから避難させるということだったのか、線量が上がっているから避難させるということだった

【取扱い厳重注意】

のか。

○寺田補佐官 ここに書かれている括弧の何日からのを言うと、大方は多分爆発的な事象、一番最初は 3.11 はそうですけれども、3.12 自体は線量が第 1 プラントの近くの線量が上がり始めたという話で多分やったのだと思います。そういう報告を受けた後でしたので。

正直言うと、政府として文科省がやっていたのでしょけれども、周辺の市町村の線量がどうかというデータは、この直近のころはなかったと思います。東電が持っている自分たちのプラントの線量がどうなっているかというのはよく情報が入ってきましたけれども、今あるような何市がどれぐらい、何市が何とかというのをもって線量がこれぐらいだからここまでは退避させようとかという話をこの 3 月 11 日～15 日とかという間にやっていたとは私の記憶にはないです。

○質問者 実際に被曝している、健康被害が出るかもしれないとか、あるいはかなり浴びているかもしれないという危機感というのは官邸内においてはなかったのですか。

○寺田補佐官 作業員の方ですか。それとも住民の方ですか。

○質問者 住民。

○寺田補佐官 住民の方にはそういう可能性があるということを別に没却してやっていたわけではないとは思いますが、実際どのような線量になっているのかとかということ自体をリアルタイムで把握はできていなかったとは思いますが。

ヨウ素剤のときか、淡い記憶になるのですが、ヨウ素剤を飲ませるか、飲ませないかという話というのは、具体的な日時は覚えていないですけれども、議論があったときに。

○質問者 恐らく 23 日が最初だと思います。

○質問者 小佐古先生はいらっしゃいましたか。

○寺田補佐官 小佐古先生は 16 ぐらいか。

○質問者 その議論をされたときにです。

○寺田補佐官 小佐古さんがいたときだったかな。安全委員会か保安院どちらかだと思いますけれども、それは自治体も持っているので医者が適したタイミングで飲むみたいな話をしているときに、それはどういうタイミングが適しているのかと、どれぐらい線量が上がっているのかというのがないと、それは医者だってわからないでしょうみたいな話を政治側がしゃべっていたような記憶があるのです。なので、そこから勘案するに、ではどれぐらいの地域がどれぐらい上がっているかというの把握できていなかったのではないのかなというのがかなり後からの自分なりの思い起こしの検証になります。実際、福島市がどれぐらいだとかというのを 15 ぐらいの間にリアルタイムでは見ていなかったですし、またそれを分析できるような感じではなかった。とにかくモニタリングポストでは車を走らせて線量を測れとか、後々、時間軸はわかりませんけれども、どの地域がどれぐらいかというのを一括で経産省のホームページにやるとか何とかというのはやっていたけれども、本当にこの緊迫した 3.11 から 3.14 ぐらいまでの間に避難区域を決めるときに、どの地域がどれぐらいだというのを綿密にわかる状態だったかというのはなかったと思いま

【取扱い厳重注意】

す。

○質問者 周辺のモニタリングポストはほとんどアウトになっていましたね。

○寺田補佐官 という話をそのときに受けました。

○質問者 それと危機管理という基本的なことになるわけですけれども、こういう経過を見て、特に最初の数日間の経過を見て振り返ってみて、やはりこういうところが一番問題だったとか、こういう難しさがあつたとか、その辺りについて感じられていることがありましたら。

○寺田補佐官 全般的に準備ができていなかった。準備というのは物理的な準備もそうですし、想像という意味でのリスク範囲を決めるという意味での準備不足もありましたし、想定したリスク範囲をこなすというトレーニングという意味での準備もなかったなと思います。

このような原発事故が起きたときにどうすべきかということを瞬時に判断して行動できる政府ではなかったと思いますし、それは菅総理ではなくて違う総理があつたときだつたらと言つても、多分同じようなレベルだつたと思います。保安院自体、いろんな見方はありますけれども、保安院という原子力の事業者をまさしく保安する人間、組織自体が独自に線量を測ることができないと聞いたときに正直驚きましたし、せめて東電から情報をもらわないと、チェックしなければいけない側がチェックされる側のデータしか持つてこられないということ自体に物すごくびっくりしましたし、あと政府の組織自体も、SPEEDIも結局そうでしたけれども、省庁再編のあおりを受けたのかどうか知りませんが、文科省の旧科技庁のところを実働のモニタリングをする部隊があつて、保安院は持っていません。保安院は文科省から聞かなければいけなくて、それを統括するはずの内閣府の安全委員会自体がアメリカに比べると月とスポンぐらいの危機管理能力しかないという行政体としての仕組みとしても物すごくおろそかになっていましたし、事業者としてもシビアアクシデントの範囲が余りにも浅いというのと、浅い範囲の中でのトレーニングもできていなかったというのと、政治側もそれに対する準備をしていなかったというところは、そもそもどちらかというところと、さまざま検証してやっていくのでしようけれども、3.11から後のオペレーションがどううまくいったかというところよりも、もう既にそれまでに準備されていたさまざまなことが余りにもすべて不足していたのではないかなというのが率直な思いです。

○質問者 根本的にはどこにあつたとお考えになりますか。

○寺田補佐官 もう陳腐化された言い回しですけれども、やはり安全神話的な過信があつたとは思いますが。やはり原子力の持つ怖さというのは十分わかっている国であるはずなのに、それを利用することに対する安全意識というものが他の国に比べて圧倒的に低かつたなと思います。だからこそ保安院自体がしっかりと東京電力なり事業者を管理できていない、保安できていないというのが1つの象徴かなと思いますし、政治側もそれが大きなリスクであるということをわかっていなかったのというのも反省しています。

【取扱い厳重注意】

○質問者 それともう一つは、具体的な対策本部づくりなのですけれども、国の防災対策基本計画によると、こういう事態が起こったときに各省庁から集まって、まさに [REDACTED] [REDACTED] 対策本部が本来そこで意思決定をしたり機能したりするわけですが、その一方、5階で菅総理を中心として幹部が集まって協議して基本方針を決めるという二重構造になってしまった。下の方では結構各省庁からいろんな情報が入ったりとかしていたはずなのですね。それとの関係が二重構造であるがゆえに情報が十分生かされなかったとか、上に上がっていなかったとか、いろいろ問題が起こったのではないかと思います。

○寺田補佐官 まさしくそこを問題視されている部分があるのかなとお伺いしながら思いましたけれども、例えば下の危機管理の事務的なトップは危機管理監ですけれども、基本的にずっと下に勿論おりました。何かあるたびに避難区域の確定とかで上に上がってきてもらったと。私は5階にいた人間として、危機管理監に来てもらって下の情報集約の一応トップですから、そこが一番物事を知っているものだと思っていて、それを基にいろいろ判断をしていたのだと思います。

なので、私はどちらかというと地下と5階との断絶というよりは、その事務自体が事務レベルの中でのトップまでに上がる連絡組織、連絡体系というのが果たしてうまくいったのかなと。例えば SPEEDI の情報自体がなぜ危機管理監に上がらなかったのかなというのは後々皆さんでいろいろ検証しているのを見て不思議に思ったので、もし伊藤危機管理監であったり、官房副長官の事務でもいいですけれども、ここと政治側が物理的に断絶をしていて事務の情報も政治に上がらないというのであれば、まさしく地下と5階の断絶のような気がしますけれども、5階は5階で議論しながら重要案件は危機管理監を含めて、瀧野さんも含めてずっと5階にいて議論しているわけですから、そこはちょっと単純な地下と5階の分離というのは安直かなと。

まさしく先ほど申し上げた内閣府と文科省と経産省、保安院と東電、ここら辺が全体的にうまく情報を集約できていない。それは集約するべきところが地下だとしたら、地下の中で事務方として上まで上がり切っていないと、当然、そのトップの危機管理監以外の下の人間がそこを通り越して政治側に情報を上げるというのは考えにくいことですから、勿論、5階と地下というものの物理もあるとは思いますが、その前に1回、本当にあそこの危機管理センターというものが情報集約として政治側までいかないまでも、危機管理監とか含めて上がる組織になっていたのかなというのは、物すごく私は疑問に思いました。

○質問者 どうすればいいかという辺りについてはいかがですか。

○寺田補佐官 さっきと繰り返し言うてはあれですけれども、文科省自体がモニタリングをして、それを他の省庁の保安院が取るといようなことをやっている限りは無理だと思います。やはりアメリカの例とかを見てみても、一体的にそれは全部1つの組織の中で完結して独自にやるという形をとっていますので、今度原子力安全庁ができるときにも、相変わらず文科省にモニタリングの実働をさせようとしているという縦割りの雰囲気がある

【取扱い厳重注意】

ことは、私は両文科大臣と細野さんに申し上げましたけれども、やはりそういうところから一つひとつ上がるはずだった情報が上がらないというのはあると思いますし、あと事業者と保安するチェックする国の体制自体がかなりの緊張関係にない限り難しいだろうなど。保安院自体がもうデータも含めて全部、保安院自体は文科省に国独自のモニタリングを任せ、炉がどうなっているかということを全部事業者に任せているということ自体無理です。私はこれから原発を動かすということの判断はあるにせよ、各原発自体に保安院自体が独自の人間をちゃんと常駐させ、独自の、事業者ではない形で情報をしっかり上げる仕組みを持つておくということも必要だと思います。

それら全体自体が今回起きた事故よりもより一層深刻なことを想定した設計図の中でやると。飛行機と一緒にですけども、どこかのエンジンが壊れたら、どこかのエンジンが補完するぐらいの多重的なことを積み重ねて、より今より深刻なケースを想定した危機管理体制を持つというぐらいが必要かなと。ちょっと話が散漫になりましたけれども、そういう思いがあります。

○質問者 いや、明確です。それを妨害するものというか、相変わらず文科省が SPEEDI を管理するとか、そういうふうに文科省側もそうだし、政府のもっと上からもばちっとはめ込むようなのができない条件は何なのでしょう。

○寺田補佐官 役所自体は既得権益を守ろうとする、文科省にしてみればどうしてもモニタリングしたいというよりは、その部署を抱えている以上、そこを手放したくないという組織防衛の1つだと思うのです。それはそれでよくないことですけども、彼らにとってみればやむを得ないのかなと思う。そこは政治がおかしいものはおかしいと言ってまとめる、政治的な力がないというのは問題だと思いますし、一義的にはそこですけども、あとは国民全体として、もう一回原子力はどうするのかということをやちゃんと考え直して政治を動かしていないというのもあると思います。やや政治的な話になって申し訳ないです。すべては政治の責任だと思います。

○質問者 先生、時間は大丈夫ですか。よろしいですか。

○寺田補佐官 もうちょっと大丈夫です。

○質問者 長い時間ありがとうございました。

○寺田補佐官 私もなぜあんなったかというのは十分本当に将来のために勉強したいと思っていますので、是非よい報告書を出していただければと思います。

○質問者 ありがとうございました。